

## ぐるだいニュース

第16号(1999年12月15日)  
発行所：〒004-8631 札幌市厚別区大谷地西2-3-1  
北星学園大学社会福祉学部(施内研究室)  
日本グループ・ダイナミクス学会  
電話：011-891-2731 Fax:011-894-3690  
発行人：大坊郁夫 編集担当：堀毛一也

### ★★ 第47回大会開催 ★★

日本グループ・ダイナミクス学会第47回大会が、9月18日、19日の両日、大阪国際女子大学にて開催されました。残暑の中、205名(会員169名、非会員36名)の参加者を得、シンポジウム「実践としてのグループ・ダイナミクス」をはじめ、5つのワークショップなど多岐にわたる企画の中で活発な論議が行われ、盛会のうちに終了いたしました。大会委員長の石井滋先生はじめ、開催に向けご協力いただきました皆様にあらためて厚く御礼申し上げます。

総会後に行われた推戴式で、安藤延男先生、木下富雄先生、原岡一馬先生が、新たに名誉会員の推戴を受けられました。このうち原岡先生は、当日ご都合によりご欠席になりましたので、ニュースレターへご挨拶のご寄稿をお願い致しましたところ、ご多忙の中、快くお引き受けくださいました。謹んで掲載させていただきます。また学会の印象記を、広島大学の吉田綾乃さんにお願ひしました。ご協力ありがとうございました。

### ★★ 名誉会員の推戴を受けて ★★ 久留米大学 原岡 一馬

今回、日本グループ・ダイナミクス学会から名誉会員として認めてもらいありがとうございました。心から感謝致します。

早いもので、学会の創設以来50年近くになりました。当時、九州大学の大学院生であったこともあって、長い間、学会本部の仕事にかかわってまいりました。その間のいろいろな思い出があります。学会誌「実験社会心理学研究」の前身である「教育・社会心理学研究」は、初代の会長であった牛島義友先生が、学会には是非、学会誌を作るべきだという意見を出され、当時、少ない会員の会費ではどうにもならず、九州大学の紀要の経費をもとに、いろいろ節約し、捻出されてこちらにまわされたいきさつがあります。現在だったら問題になるかも知れませんが、学会発展のためということで進められました。印刷は、安くするため、福岡刑務所の印刷部に頼みました。当時、助手でした私は、刑務所に原稿や校正をもって何回も通いましたが、何しろ、当時の受刑者の人がやるのですから、校正した箇所がその通りに直らず、何回もやり直し、校正どおりに直ったと思ったら、今度は他の箇所が違ってきていたなど大変だったことを思い出します。

当時の研究傾向は、まさに、グループ・ダイナミクス研究で、学校や地域や職場での集団研究、特に、小集団の研究、リーダーシップの研究が中心でした。これは、Kurt Lewinの影響を受けたアクションリサーチでして、私も集団決定の実験的研究と実践的研究を行いました。

それ以来、アメリカでの研究傾向の変化に伴って、日本での研究も変化してまいりました。この50年間、日本の研究はアメリカでの研究の後追いの傾向を示してきたと思います。認知的不協和理論、バランス理論、対人認知、社会的欲求、帰属理論、援助行動に関する諸研究などほとんど同様で、現在でも、日本の研究にはこの傾向が強いと思います。

1957年、Festinger が認知的不協和理論を出す、1・2年で認知的不協和を取り扱った研究が多く現れました。それらの研究は、巧妙な手続きをできるだけオリジナルな研究に真似て行うことでした。違った結果がでると、その実験は失敗したと解釈したものでした。その後も同様な傾向が続いてきているようです。

Festinger と Carlsmith の認知的不協和に関する実験において、「学生の被験者にお金を渡して嘘をつかせる」というやり方は、アメリカの学生と日本の学生とで全く違った心理的意味をもつことに無関心でした。当時の日本の学生は、自分から進んで教授の研究を手伝い、そのことが自分の勉強になるのであり、そのためのお金など考えもしなかったものでした。操作した具体的手続きは同じでも、受けた被験者の態度や文化の違いから、心理的リアリティと意味付けは全く違っていて、違った結果がでるのは当然だということに気づかなかったと思います。心理的に同等なリアリティとインパクトを持つような操作こそ、比較可能な実験操作だといえます。例えば、空腹時の食事行動を観察するにも、空腹の程度を同じにして、西欧の高齢者と日本の高齢者に同じパンを与えた行動観察は本質的比較にはならないと思います。それは、それぞれの被験者が同等の心理的状況に置かれていないからです。西欧の高齢者には主食であるパンを日本の高齢者には主食であるご飯を与えたときに、被験者にとって主食という同等の行動的意味の状態が得られ、はじめて比較可能になると思われます。

心理学が他の社会科学者から受ける批判の1つに、心理学の実験は実験室内の法則だけに目を奪われ、操作したり、観察したりしていて科学的だと思っているようだが、現実社会の人間行動とは違い、人工的か社会的に無関連な行動を取り扱っていることが問題であるというものです。これには、反論が十分ありますが、残念ながら、現実に行われている実験研究や調査研究には、それに類するものが多いことも事実のようです。

例えば、自信度の違う集団を作るために、「あなたは平均的大学生より優れている人たちです」とか「平均的大学生ほどではありません」とか教示して、自信度の違う集団が出来上がったと解釈し実験を行うことがあります。果たして、教示を受けた被験者が高い自信や低い自信をもつようになったのでしょうか。それは、学期末試験で優等生であることを知ったり、欠点を取って進級できないのではないかと心配している場合の自信の度と現実性とインパクトにおいて極めて違うと思われます。現在の日本における社会心理学の研究には、リアリティとインパクトの問題をもう一度考え直して見る必要があると思います。

また、その研究が相関的研究を基にしたものなのか実験的研究を基にしたものなのかによって、因果関係の解釈のできる範囲と程度が異なると思われます。相関的研究でありながら因果関係とその方向を示した解釈があまりにも多すぎると思います。また、最近、統計的手法がかなり開発され非常に便利になりましたが、どの研究も同じ処理の仕方をして、同じように解釈しているような感じがします。統計的処理にかけける前に、その研究の目的、研究手続き、実験事態および実験における被験者の心理状態、調査の事態を検討しておくことが重要であって、過程を考えずに得られた結果を複雑な統計処理にかけさえすれば心理的法則が得られるという考えはどうかと思います。十分に、実験条件や被験者に引き起こされる操作の意味を考えてみる必要があると思います。

リアリティをもったインパクトの高い実験条件や調査事態を検討して、目的に合致した意味ある研究がたくさん行われるようになれば、日本における社会心理の理論も展開されるようになると思いますし、そのことを望むものです。

以上、思いつくまま、とりとめもなく意見を述べましたが、老人の独り言と思ってお許し下さい。

改めて、名誉会員に加えてもらったことに対し会員の皆さんに心より感謝致します。

★★ 第47回大会印象記 ★★ 広島大学生物園科学研究科 吉田綾乃

第47回日本グループ・ダイナミックス学会は大阪国際女子大学人間科学部の主催のもとに九月十八日・十九日にわたり開催された。九月の半ばといっても、まだまだ大阪は残暑が残っており、駅から大学までのわずかな距離でも汗ばむくらいであった。また、今回の大会はアジア社会心理学会が同年開催されたせいもあってか、参加者が去年より随分少ない印象を受けた。

大会では、シンポジウムがひとつとワークショップが5セッション開催された。本大会で私にとって最も印象的だったのは、シンポジウムである。テーマは「実践としてのグループ・ダイナミックス」であり、学校領域、企業組織、ボランティア活動それぞれの領域での実践活動が、ビデオやスライドなどを用いて興味深く紹介されていた。大学院生という身分では、実際に現場でどのような活動が行われ、どのような成果が得られているのかを知る機会が少ない。今回はそのような現場での様々な活動を、具体的に知ることができる貴重な機会であったと思う。全体の発表を通じては、「グループ・ダイナミックス」として扱われる領域のすそ野の広さを痛感し、さらに、理論を現場での実践として適用するためには、いくつかの方法論的なステップが必要であることを改めて感じた。

また、ワークショップは「英語論文の書き方」、「対人関係・集団を理解するためのコミュニケーションスキル研究」、「感情の包括的理解にむけて」、「喪失、そして生」、「在宅介護支援のコミュニティ・ネットワーク 一個の介護から共に生きる介護へ」というテーマでそれぞれ開催された。そのいくつかは、現実社会において早急に議論が必要なテーマであり、かつ諸問題に即時に対応することが可能なものであった。当然のことではあるが、学会というものは、時代や社会の流れ、またその必要性を見事に反映するのだなあ、と感心してしまった。個人的には、発表件数が例年ほど多くなかったせいか、私のつたない発表にも多くの先生方や院生の方が足を運んで下さり、たくさんの貴重なご意見やご指摘をいただいた。とても幸運だったと思う。懇親会では、開催校の先生方のお言葉通り、さすが大阪！と思わせる内容で、関西の味を堪能することができた。後から、大阪国際女子大学には心理学の大学院がなく、運営の一切は諸先生方と学部生のスタッフのみで行っていたと伺った。大会準備や開催時には、大会経験のある院生でさえ右往左往するような事態がしばしば生じる。にもかかわらず、大会を十二分に盛り上げられた、諸先生方とスタッフの皆様には深く御礼を申し上げたい。

★★ 優秀論文賞の選考結果 ★★

本年度の優秀論文賞は選考委員会（委員長 古畑和孝氏）による慎重な審議の結果、一般部門、若手研究者部門それぞれ以下の論文に決定しました。授賞式は9月18日、学会総会に引き続き執り行われ盛んな拍手が送られました。

一般部門：森久美子氏

「囚人のジレンマゲームにおける社会的価値志向性と利得構造認知」

若手部門：長谷川 孝治・浦 光博氏

「アイデンティティ交渉過程と精神的健康との関連についての検討」

★★ アジア社会心理学会関連の連絡事項 ★★

東京大学の山口勸先生から、アジア社会心理学会関連のご連絡を3点いただきました。EJSPの割引など、特典つきのお話もありますので、皆様是非ご検討ください。

Wiley よりアジア社会心理学会会員に対して、European Journal of Social Psychologyの特別割引料金が提示されています。これは通常は個人購読で\$270のものを\$85にするというものです。この特別割引はアメリカのSociety of Experimental Social Psychology(SESP)の会員に与えられるものと同じ割引率です。アジア社会心理学会への入会は、グルダイ会員の場合には無料です。この際にアジア社会心理学会へ入会されてはいかがでしょうか。

アジア社会心理学会への入会手続きがまだの方は、このニュースレターについている入会申込書に記入して、以下にお送り下さい。

渥美公秀先生 〒565-0871 吹田市山田丘1-2 大阪大学人間科学部

なお、European Journal of Social Psychologyの割引購入の具体的手続きについては、確定し次第お知らせします。

アジア社会心理学会で、Progress in Asian Social Psychology, Vol.2を受け取らなかった方は、山口 勸先生(東京大学大学院人文社会系研究科: susumy@L.u-tokyo.ac.jp)まで、できるだけ電子メールでご連絡ください。本を郵送致します。

Progress in Asian Social Psychology, Vol.3への投稿論文の締切が2000年1月末になりました。論文の送り先は次の通りです。

Professor K.K. Hwang,

Department of Psychology, National Taiwan University, Taipei, Taiwan.

★★ 集団指導士資格に関する論議 ★★

ニュースレターの第14号でもとりあげましたが、本学会では集団指導士（仮称）の資格認定制度の導入を検討中です。9月の総会で、この件に関し、地区理事のご協力をいただきながら、地区会員との議論の場を設けるという提案がなされました。

これを受けて、中国・四国地区では、早速意見交換会が開催されました。地区理事をお助めの広島大学・深田博己先生からご報告をいただきました。

中国四国地区では11月27日・28日の両日にわたって開催された中国四国心理学会第55回大会を利用し、会場となった広島大学総合科学部で28日午後3時半から4時半までの約1時間、GD学会会員に呼びかけ、「集団指導士」資格認定問題に関する意見交換会を開きました。12名の参加者があり、活発な意見交換が行われました。参加者に対しても、欠席者に対しても意見を提出していただくようお願いしてありますが、現在のところ一部の方からしかご意見が届いておりませんので、中間報告として当日の討論内容の概要と手元に届いた意見を要約してお知らせいたします。なお、意見交換の際に、規則（案）を資料として配布しましたが、規則（案）に対しての賛否ではなく、資格認定の是非を含めて、この問題全体に対する意見を述べていただきました。

1. 「集団指導士」の資格認定制度の制定それ自体に対しては、特に反対の声は聞かれなかったが、積極的に推進すべきであるという声も弱かった。
2. 「集団指導士」資格認定にかかわる諸規則（案）に対する不安と批判が強く表明され、2000年の総会で何らかの意思決定をすることへの否定的意見が大勢を占めた。すなわち、現時点で「集団指導士」資格認定問題にゴーサインを出すことは拙速であるとの判断がほとんどであった。
3. 「集団指導士」の資格認定基準があいまいであり、資格者の品質管理が困難ではないか、という意見が多く提出された。

例えば、臨床心理士や学校心理士などの心理学会（認定協会）が認定する資格は、養成する大学・大学院の教育課程による裏付け（基準）とそれに基づき学会（協会）が判断するという、いわば二重の基準をクリアした者に対して、資格が認定される制度である。しかも、認定後の再審査制度や研修制度を採用しつつ、品質管理に配慮している。ところが、「集団指導士」の場合は、実践的集団活動の経験に基づき、学会が全責任を負う形で資格認定を行おうとしている。実践的集団活動を評価するための基準をどうするか、また、そうした活動を評価できだけの人材が確保できるのか、といった重要な問題が解決されないままにスタートすることは非常に危険である。

4. 研修制度や試験制度を充実させることで、「集団指導士」の品質管理の問題はかなり解消されるが、学会の会員にとってあまりメリットのない資格問題に時間と労力を費やすことが本当に必要なことかどうか、原点に立ち戻って再検討してもよいのではないか。

（広島大学教育学部 深田博己）

他の地区でも活発な論議をおすすめてくださいますようお願い申し上げます。また、地区理事の先生方には、地区活動の活性化を図る目的で、それぞれの地区で開催される学会・研究会と本学会との共催・連携、新たな関連研究会の立ち上げの可能性などご検討いただくこともお願い致しております。お集まりの機会に、これらの事項につきましてもあわせてご論議いただければ幸いです。

|  |
|--|
|  |
|--|

#### ★★ 学会ホームページ移設のお知らせ ★★

|  |
|--|
|  |
|--|

かねてお知らせ申し上げておりましたように、学会ではホームページの学情センターへの移設を進めておりましたが、このたび大阪大学の三浦麻子幹事の多大なご協力により、移設を完了いたしました。リンク先は以下のとおりです。Liu.J先生のAASP台北大会のreportもuploadしてあります。皆様リンク先の変更をお願い申し上げます。

<http://www.soc.nacsis.ac.jp/gda/index-j.html>

|  |
|--|
|  |
|--|

#### ★★ 常任理事会・理事会報告 ★★

|  |
|--|
|  |
|--|

日時：1999年9月17日 13:00～15:30（常任理事会）16:30～18:30（理事会）

場所：大阪国際女子大学 会議室

出席者：（会 長）大坊郁夫

（常任理事）橋口捷久、堀毛一也、村田光二、外山みどり、山岸俊男、鹿内啓子

（理 事）遠藤由美、深田博己、古畑和孝、永田素彦、西川正之、沼崎誠、大平英樹、坂元章、山口裕幸、八ツ塚一郎、吉田道雄、吉田俊和

#### 【報告事項】

##### \*編集関係

1. 実験社会心理学研究の刊行状況

##### 投稿・編集状況

特集論文4本を含み、現在33本が審査中である。このうち過年度受稿分が16本、今年度受稿分が17本である。この他、主査は決定したが副査が未決定の論文が1本ある。受理が決定し、39巻2号に掲載が予定している論文が4本、著者ににより取り下げの申し出のあった論文が4本あり、rejectされた論文は0である。

##### 特集論文の審査体制

現在、39巻2号で予定している特集「阪神大震災後のグループ・ダイナミクスー5年目の実践・反省・収穫ー」（企画者 八ツ塚一郎 理事）について、4本の論文を審査中である。一般論文と同様の審査体制をとるという常任編集委員会の方針により、編集委員長を主査、企画者と常任編集委員1名の2名を副査とした。

2. AISPの刊行状況

現在、vol.2ー2まで刊行された。実験社会心理学研究 編集委員会への日本語による投稿はない。

3. 三隅賞の選考報告

日本グループ・ダイナミクス学会から3名（大坊会長、山岸常任理事、山口勲編集委員）、AASPから2名、合計5名で選考委員会が構成された。選考委員による投票の結果、候補論

文として3編が挙げられ、協議の結果、山口 勲氏が受賞した。今後、毎年1編を選考するが、授賞式は隔年に開催されるAASP大会時に行う。

4. 「優秀論文賞」の選考報告（選考委員会 古畑和孝委員長）

選考委員（理事全員）による事前投票の結果に基づいて選考委員会で協議した結果、次の論文に決定した。

一般部門：森 久美子氏

「囚人のジレンマゲームにおける社会的価値志向性と利得構造認知」

若手部門：長谷川 孝治・浦 光博氏

「アイデンティティ交渉過程と精神的健康との関連についての検討」

なお、若手研究者の論文が増加したことを受け、現在の一般部門、若手部門別の選考方法について再検討することになった。

＊渉外・広報関係

5. 1998年度第46回大会（於：名古屋大学）決算報告

長田雅喜大会委員長から、別紙の通り報告された。

6. AASP第3回大会関係報告

台北において8月4日から7日まで開催され、23カ国から344名の参加があった。この内、日本人の参加者は121名、本学会員の発表件数は63であった。

7. 会報の発行

№13、14、15号を発行した。来年度はできれば4回発行したい旨が報告された。

8. その他

日本心理学会諸学会連合が発足し、会則の制定と役員の選出が行われた旨が報告された。また、会則と役員についての資料が配付された。

別紙のような規則、役員が報告された。

＊会員異動

1999年3月末での会員数は一般会員788名、学生会員28名、名誉会員12名、合計828名である。1999年4月1日以降の入会者は17名、退会者は16名である。会員増加の方策を検討することになった。

【審議事項】

1. 1998年度決算案・会計監査報告

篠原しのぶ、内藤哲雄 監査から、会計については適正に処理されている旨の報告がなされ、決算案は了承され、1998年度の赤字は1999年度からの会費の値上げと支出の抑制によってカバーできる見通しであることが報告された。

2. 2000年度予算案

別紙の予算案が審議され了承された。機関誌への投稿や大会発表の申し込みの際の会費の納入の確認、未納者への機関誌送付の停止など、監査からの提案を含めて、会費納入率を高める方策を検討することになった。また、機関誌や会員名簿の印刷費など、支出を抑える方策も検討した。検討事項であった大学院生の会費の値下げは、2000年度についてはできなかったが、収支の状況を改善することで、更に検討することになった。

3. 2000年度事業計画案

機関誌の発行

従来通り、年2冊を発行する予定である。

第48回大会開催校

東洋大学において開催される予定である。日程は未定。

広報（HP等）

大阪大学 三浦麻子氏にHP運営担当幹事を委嘱することになった。

地区活動・他学会との連携等

他学会のシンポジウム等について、共催の申し入れに積極的に応じること、地区理事が大会準備委員会に参加することなどが提案された。

4. 名誉会員の推戴

安藤延男 先生、木下富雄 先生、原岡一馬 先生の3名の先生を推戴条件に照らし、名誉会員に推戴申し上げ、承認された。

5. 集団指導士資格の検討

橋口捷久常任理事、永田素彦理事、山口裕幸理事、吉田道雄理事による検討委員会によって、集団指導士資格認定規則（案）が作成されたが、認定制度の是非について、役員内でも見解の相違があったため、広く会員の意見を求めようと、HPに掲示板を開設した。しかし、そこでの議論に参加した会員が一部に限られていたため、もっと多くの会員が参加した議論が必要であるとの認識から、2000年度総会までに次のような形で検討を進めることにした。集団指導士資格認定の是非および資格認定のあり方について、各地区の理事を中心に、地区会員との議論の場を設け、その内容を理事は常任理事会に報告する。この際、必要であれば規則（案）を公開してもよい。これに基づいて、常任理事会で集中的に検討し、2000年度の総会で何らかの決定をする。

★★ 総会報告 ★★

日時：1999年9月18日 12:00～13:30

場所：大阪国際女子大学

出席者：１２５名

石井滋 大会委員長からご挨拶があった。

#### 【報告事項】

##### \*編集関係

- １．実験社会心理学研究の刊行状況

##### 投稿・編集状況

特集論文４本を含み、現在３３本が審査中である。このうち過年度受稿分が１６本、今年度受稿分が１７本である。この他、主査は決定したが副査が未決定の論文が１本ある。受理が決定し、３９巻２号に掲載が予定している論文が４本、著者により取り下げの申し出のあった論文が４本あり、rejectされた論文は０である。

##### 特集論文の審査体制

現在、３９巻２号で予定している特集「阪神大震災後のグループ・ダイナミクス－５年目の実践・反省・収穫－」（企画者 八ツ塚一郎 理事）について、４本の論文を審査中である。一般論文と同様の審査体制をとるという常任編集委員会の方針により、編集委員長を主査、企画者と常任編集委員１名の２名を副査とした。

- ２．AISPの刊行状況

現在、vol.２－２まで刊行された。実験社会心理学研究 編集委員会への日本語による投稿はない。

- ３．三隅賞の選考報告

日本グループ・ダイナミクス学会から３名（大坊会長、山岸常任理事、山口勲編集委員）、AASPから２名、合計５名で選考委員会が構成された。選考委員による投票の結果、候補論文として３編が挙げられ、協議の結果、山口 勲氏が受賞した。今後、毎年１編を選考するが、授賞式は隔年に開催されるAASP大会時に行う。

- ４．「優秀論文賞」の選考報告（選考委員会 古畑和孝委員長）

選考委員（理事全員）による事前投票の結果に基づいて選考委員会で協議した結果、次の論文に決定した。

一般部門：森 久美子氏

「囚人のジレンマゲームにおける社会的価値志向性と利得構造認知」

若手部門：長谷川 孝治・浦 光博氏

「アイデンティティ交渉過程と精神的健康との関連についての検討」

なお、若手研究者の論文が増加したことを受け、現在の一般部門、若手部門別の選考方法について再検討することになった。

##### \*渉外・広報関係

- ５．１９９８年度第４６回大会（於：名古屋大学）決算報告

長田雅喜大会委員長から、別紙の通り報告された。

- ６．AASP第３回大会関係報告

台北において８月４日から７日まで開催され、２３カ国から３４４名の参加があった。この内、日本人の参加者は１２１名、本学会員の発表件数は６３であった。

- ７．会報の発行

№１３、１４、１５号を発行した。来年度はできれば４回発行したい旨が報告された。

- ８．その他

日本心理学諸学会連合が発足し、会則の制定と役員の選出が行われた旨が報告された。また、会則と役員についての資料が配付された

別紙（省略）のような規則、役員が報告された。

##### \*会員異動

１９９９年３月末での会員数は一般会員７８８名、学生会員２８名、名誉会員１２名、合計８２８名である。１９９９年４月１日以降の入会者は１７名、退会者は１６名である。

#### 【審議事項】

- １．１９９８年度決算案・会計監査報告

篠原しのぶ、内藤哲雄 監査から、会計については適正に処理されている旨の報告がなされ、決算案は了承された。

- ２．２０００年度予算案

別紙の予算案が審議され了承された。

- ３．２０００年度事業計画案

##### 機関誌の発行

従来通り、年２冊を発行する予定である。

##### 第４８回大会開催校

東洋大学において開催される予定である。日程は未定。

##### 広報（HP等）

大阪大学 三浦麻子氏にHP運営担当幹事を委嘱することになった。

##### 地区活動・他学会との連携等

他学会のシンポジウム等について、共催の申し入れに積極的に応じること、地区理事が大会準備委員会に参加することなどが提案された。

- ４．名誉会員の推薦

安藤延男 先生、木下富雄 先生、原岡一馬 先生の3名の先生を推薦条件に照らし、名誉会員に推薦申し上げ、承認された。

#### 5. 集団指導士資格の検討

これまでHIPの掲示板を用いて議論されてきたが、もっと多くの会員が参加した議論が必要であるとの認識から、2000年度総会までに次のような形で検討を進めることにした。集団指導士資格認定の是非および資格認定のあり方について、各地区の理事を中心に、地区会員との議論の場を設け、その内容を理事は常任理事会に報告する。これに基づいて、常任理事会で集中的に検討し、2000年度の総会で何らかの決定をする。

総会終了後、名誉会員推薦式と優秀論文賞授賞式が行われた。

|  |  |
|--|--|
|  |  |
|--|--|

#### ★★ 実験社会心理学研究 第39巻2号掲載予定論文 ★★

|  |  |
|--|--|
|  |  |
|--|--|

<一般論文>

平井美佳 「日本人らしさ」についてのステレオタイプ —「一般の日本人」と「自分自身」との差異

奥田秀宇 対人魅力における重要性効果 被験者間および被験者内計画による検討

中村桂子・浦光博 適応および自尊心に及ぼすサポートの期待と受容の交互作用効果

木村堅一 説得に及ぼす脅威アピールの効果—防護動機理論からの検討—

<展 望>

遠藤由美 「自尊感情」を関係性からとらえ直す

|  |  |
|--|--|
|  |  |
|--|--|

[\(資料1\) 日本グループダイナミクス学会第46回大会決算報告書](#)

[\(資料2\) 日本グループ・ダイナミクス学会1998年度決算報告書](#)

[\(資料3\) 日本グループ・ダイナミクス学会2000年度予算\(案\)](#)

学会細則3章11条の規定に基づき、当日は仮総会となり、このニュースレター発行後、1ヶ月以内に会員総数の過半数の反対がない場合に、決議として効力を発揮することになります。よろしくご検討ください。

|  |  |
|--|--|
|  |  |
|--|--|

#### ★★ 共催研究会のご案内 ★★

|  |  |
|--|--|
|  |  |
|--|--|

電子情報通信学会HCS研究専門委員会との共催で研究会が開催されます。概要は以下のとおりです。皆様の参加をお待ち申し上げます。

#### ●電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎(HCS)研究専門委員会

第5回研究会

●日 時： 平成12年1月20日(木) (21日には引き続きHIP研究会が開催されます。)

●会 場： ATR(京都府精華町)

●テーマ： 「ノンバーバルコミュニケーションおよび一般」

【問合先】中村 真(宇都宮大学国際学部) TEL/FAX 028-649-5209 E-mail: nakamura@cc.utsunomiya-u.ac.jp

[備考] 参加費は無料です。ただし、研究会の資料[技報]を入手される場合にはその代金(見込み1000円程度)が必要です。

|  |  |
|--|--|
|  |  |
|--|--|

#### ★★ 事務局からのお問い合わせ ★★

|  |  |
|--|--|
|  |  |
|--|--|

◆実験社会心理学研究の特集テーマ募集

事務局では、実験社会心理学研究の特集号テーマを随時募集致しております。詳細は事務局までお問い合わせください。

◆会費納入のお願い

99年度の会費をまだ納入いただいていない方は、急ぎご納入くださいますようお願い申し上げます。未納の方には振り込み用紙を送らせていただきます。

|  |  |
|--|--|
|  |  |
|--|--|

★★ 会員情報 ★★

|  |  |
|--|--|
|  |  |
|--|--|

◆退会（逝去分のみ）

牛島 義友（逝去）

★★ 学会・研究会等の情報掲示板・新刊紹介 ★★

|  |  |
|--|--|
|  |  |
|--|--|

◆名古屋地区社会心理学研究会

今年度の名古屋社会心理学研究会(N S P)の活動は、以下のようなものでした。

第1回 名古屋社会心理学研究会

日時 1999年4月24日(土) 午後3時から午後5時

発表者 北折充隆氏(名古屋大学大学院教育学研究科)

テーマ 社会規範からの逸脱行為における違反抑止 メッセージの効果

第2回 名古屋社会心理学研究会

日時 1999年6月19日(土) 午後3時から午後5時

発表者 植村 善太郎氏(名古屋大学大学院教育学研究科)

テーマ 集団が新規参入者を受容する過程 一高校・大学の事例一

第3回 名古屋社会心理学研究会

日時 1999年11月13日(土) 午後2時半から午後4時半

発表者 森永 康子氏(神戸女学院大学人間科学部)

テーマ 女性が働くということ

第4回 名古屋社会心理学研究会

日時 1999年12月4日(土) 午後3時から午後5時

発表者 潮村 公弘氏(信州大学人文学部)

テーマ 社会的カテゴリーに基づく性ステレオタイプの認知機構の解明

一情報処理特性論から社会的アイデンティティ論への展開一

(名古屋大学教育学部 植村善太郎)

◆九州地区社会・教育心理学 (KSEP) 研究会

九州地区社会・教育心理学 (KSEP) 研究会は、今年も久留米大学で行われています。1999年は、第22回山口裕幸先生にはじまり、ロイヤス・ティモシー先生、多賀太先生、城仁士 先生が発表されました。12月には、第27回が企画されています。今回は久留米大学の原岡一馬先生が、本学会と日本社会心理学会の名誉会員になられたこと、今年度で退官されることを記念した講演会になります。また、11月20日(土)～21日(日)には、九州心理学会が大分県立芸術文化短期大学で開催されました(事務局は、大分大学教育福祉科学部)。大会の目玉企画は、公開シンポジウム「学級崩壊：その現状と取り組み」で、GD関係では、司会が大分大学生涯学習教育研究センターの阿久根求教授、シンポジストとして九州大学医療技術短期大学の関文恭教授が参加されました。

(熊本大学教育学部 吉田道雄)

地区理事の先生方に、講義やゼミでの使用に適した新刊書のご紹介をいただきましたところ、お二人の先生からご回答をいただきました。ありがとうございました。

◆原田純治編著「社会心理学」-対人行動の理解- プレーン出版

「自己」という個人レベルから「社会的影響」という集団のレベルにわたり、社会心理学の基本的内容を分かりやすく解説した好著。「ストレスとサポート」などの新しいトピックスも取り上げられている（熊本大学 吉田道雄）。

◆坂元 章・森 津太子・坂元 桂・高比良 美詠子（編） 「サブリミナル効果の科学

－無意識の世界では何が起きているか－ 学文社 2400円

サブリミナル効果に関するこれまでの社会現象や、実証研究の知見をまとめ、コメントを加えている本です。サブリミナル効果の研究動向はこの本でかなり把握できるのではないかと思います（お茶の水女子大学 坂元 章）。

|  |
|--|
|  |
|--|

★★ 公募情報 ★★

|  |
|--|
|  |
|--|

※募集先： 北星学園女子短期大学 生活教養学科

専門分野： １）社会心理学、発達心理学、人間関係論等関連科目

２）家族論、女性学、生活文化等関連科目 いずれも教授または助教授

締切日： 2000年1月14日

連絡先： 北星学園女子短期大学生活教養学科 福山和子先生 011-561-7156

※募集先： 北海道大学文学部 心理システム科学講座

専門分野： 心理学、認知科学 助教授

締切日： 2000年2月29日

連絡先： 北海道大学文学部心理システム学講座 阿部純一先生 011-706-4156

※募集先： 法政大学文学部

専門分野： 心理学 教授・助教授・講師

締切日： 1999年12月21日

連絡先： 法政大学学務部文学部係 03-3264-9324

|  |
|--|
|  |
|--|

◆投稿論文の送付、機関誌編集に関する問い合わせ、その他学会運営に関するご意見◆

北星学園大学社会福祉学部（鹿内研究室）

〒004-8631 札幌市厚別区大谷地西2-3-1 北星学園大学社会福祉学部

電話：011-891-2731 Fax：011-894-3690 E-mail：z00119@hokusei.ac.jp

◆ニューズレターの編集・記事の投稿◆

岩手大学人文社会科学部堀毛研究室

〒020-8550 岩手県盛岡市上田3-18-34 岩手大学人文社会科学部

電話・Fax：019-621-6842 E-mail：kckehori@iwate-u.ac.jp QGB03376@nifty.ne.jp

|  |
|--|
|  |
|--|

（編集後記）大阪の夏は暑かった！でも、早くも水点下の世界の盛岡では、その暑さが懐かしい気すら致します。2000年までとわずか。社会心理学にも新しい時代が到来するのでしょうか。原岡先生のお言葉が心にしまっています。本来はもっと早くにお届けすべきものでしたが、忙しさにかまけすっかり遅くなってしまいました。NLの発行も本（予算）年度から4回になる予定ですが、この調子だと危ないかも・・。Y2Kが気になるので、正月はおとなしくしているつもりです。皆様20世紀最後の新年を有意義にお過ごしください（堀）。

|  |
|--|
|  |
|--|